平成二十七年度入学者選抜試験問題

医学部医学科
前期日程

国語

注意事項

1　試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2　この問題冊子の本文は、1ページから16ページまでです。
3　試験中に問題冊子の印刷不鮮明・落丁・乱丁、解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。
4　監督者の指示にしたがって、解答用紙に**大学受験番号**を正しく記入してください。**大学受験番号**が正しく記入されていない場合は、採点できないことがあります。
5　試験終了後、問題冊子と下書き用紙は持ち帰ってください。

一　次の文章を読んで、後の問い（問1～6）に答えなさい。

人は、初めに、もう一人の人と出会うのではない。
初めに、人は「出会う」のだ。
その出会いの向こうに、人がいた。
そして、その出会いのこちらに、自分という人がいたのだ。

自分という人は、出会いによって発見される。出会いによって、自分は人になる。
それは、出会いの向こう側に発見された人と、一見似ているが、同じではない。
「人」と「出会う」のは、自分である。自分が「人」と比較される。一般に「比較」というのは、「自分」抜きに、あれとこれとを比較する、という場合に使われることが多い。たとえば「比較」は、比較文学や比較言語学、比較政治構造論など、今日盛んな学問となっているが、いずれも自分抜きに、自分たち抜きに、あれとこれとを［　A　］に比較する。
ところが、こういう比較の学問もあった。
ジャン＝ジャック・ルソー[注①]はかつて『人間不平等起源論』（一七五五年）で、地球上で、自分たちとは違った生き方をしている人々がいるという事実を知ることは、自分たち自身を知ることになる、と説いた。そして、現代の故レヴィ＝ストロース[注②]は、十八世紀のルソーのこの言葉を引用して、文化人類学とは、自己を「他者」として知ることであると言い、そのことを教えてくれたルソーを称えて、「文化人類学の祖、ジャン＝ジャック・ルソー」という論文を書いている。
人と人、人々と人々とが、比較すれば結局同じであるという考え方は、近代になって［　B　］に造られた考え、平等観である。この考え方は、近代以前の封建的で不平等な考え方を覆すのに有効だった。およそ「平等」とか「等価」というのは、西洋文化の基本である。左右の値が全く等しいという方程式をつくり出し、この数式をもとに自然科学のソウダイ（ア）な世界を築いたのも西洋人であった。a＝bという、このaとbはなぜ等しいのか。この世に全く等しいものは全くない、その方が現実にかなっているであろうし、等しくないジョウヨ（イ）を切り捨てた上でこの方程式は有効なのである。
それを、ここで、シンメトリー構造観、と言っておこう。
シンメトリー構造観は、［　C　］に、事（コト）に基づいているのではなく、事（コト）を基にして、言（コト）が造り出しているのである。

言は、物語となり、歴史となって、初めの出会いの事を覆い隠していく。時間の経過とともに、人々が出会うのは、一見事かと見えて、実は言に整序された物語となっている。

シンメトリー構造観は、人間についての基本的人権思想を世界中に広め、また等質、等価な製品を大量に造り出し、生活を豊かにした。――その有効性を十分認めた上で、さらにその有効性の限界を、違った視点から指摘しておきたい。

今日、時代は異文明、異文化が急速に、激しく接触し、衝突しあっている。私たちの周囲には、かつて知らなかった異質な思想、異質なモノが、見慣れなかった人とともに到来している。

異界から到来した異質な［い］が、やがて［ろ］によって整序され、覆い隠されて、人々はそれなりに貴重な言として扱うようになる。およそ翻訳語はその典型である。

こうして人々に便利であり、貴重なものとして扱われ、同時にまた人々をアザムき、誑かすようになった言葉現象を、私は「カセット効果」と呼んできた。そして、この言葉現象には、当然文明、文化の背景があり、そこにも同じような効果が考察できる、と考えている。

カセット効果とは現象の「現れ」の結果である。どうしてこういう効果が現れてくるのか、と追及していくと、およそ地上で異質な存在が「出会う」ところから起こっている、と気づく。カセット効果を追求してきた私が、遂に「出会い」の現場に着目するようになった次第である。

和辻哲郎は『風土』の中で、西洋の風土と文化を論じて、西洋の自然においては、木がまっすぐに、左右均整のとれた形をしている、松の木でもそうだ、これが西洋文化の基本的性格を作ってきた、と述べている。確かに、均整のとれたシンメトリーの形は、西洋文化の基本形であろう。

シンメトリーは、自然のうちにあるばかりでなく、人間の体じたいもそうだ。人間の裸の体である。裸の体は、世界中どこにでもあったはずである。ところが、裸の体を特に大事にしたのは、どうも西洋のギリシャ人だったようだ。よく知られているように、古代オリンピックは、素っ裸で競技した。いつも着物をきている人々が、公衆の面前でわざわざ素っ裸になったのである。女の裸姿が美しい、というのは、今日では美術鑑賞の常識となっているが、よく考えてみると、これは古代ギリシャ人が創り出したものの見方である。日本にも、中国にも、インドにも、こんな考え方はなかった。素っ裸になって、全身を映す鏡の前に立ってつくづくと眺めてみるといい。先入観抜きに、実物そのものを、「形」として眺めてみよう。いったいこんな姿が美しいのか。人間の裸姿が美しいというのは、古代ギリシャ人の独自な、独創的な文化の所産だった。これを、ルネッサンス以後の西洋人は真似をして受け継いだのである。

人間は万物の尺度、というのも、古代ギリシャ人の独自な考え方だった。この人間尊重と、人間の裸尊重とが一緒になって、左右均整のとれたシンメトリーという形が西洋文化の基本形になったのだ、と私は考えている。

考えてみると、西洋におけるシンメトリー的発想の根は深い。たとえば、西洋を旅行するとまず目に映る建物、これがおよそ左右均整である。庭園がそうだ。これは日本でも西洋式庭園というのがシンメトリーのお手本みたいで、他方日本の伝統的庭園が、必ずシンメトリーでないのといい対照になっている。中国の建築はやはりシンメトリーが多く、昔から日本は中国式をお手本としていたので、これを真似して建物を造ったが、いざ造るとき、これは建築の専門家の話であるが、日本の大工さんは左右の均衡をどこかで必ず崩しているのだそうである。

ところが、このような「等価」にもとづく西洋文化に対する批判も、西洋じたいの中からさまざまな形で提出されている。ニイチェ[注⑤]以来の反理性主義、構造主義、さては複雑系[注⑥]、クレオール[注⑦]など、いろいろなところから伝統的西洋文化への批判の声があがっている、と見ることができよう。

左右対称のシンメトリーという基本的な図式に対して、他方、「オモテ・ウラ」という図式で文化の構造をとらえる考え方がある。

私はここで、シンメトリー構造ではないという批判的な視点で、このオモテ・ウラ構造を見直してみたいと思う。とりわけ、「出会い」の構造を根本的に捉えるうえで有効な方法である、と考えるのである。

シンメトリー構造は、実験された事実、すなわち［は］を、方程式などの記号、広い意味での［に］にまとめあげようとする。この過程で切り捨てられた［ほ］を、如何にしてくみ上げることができるか。――そこで、この「オモテ・ウラ」構造に着目したいのである。

発想のもとは、人間のからだである。両手を目の前に広げて見せると、シンメトリーの形である。しかしそれは、その人間を真正面から見た時のことであって、真横から見ると、左右の形はまったく違って見える。その片方はオモテで、反対側はウラ、というわけである。人間のからだ全体を見ても、同じことが言える。昔から、人間は万物の尺度、と考えられているから、こういう二とおりの基本形は、人間の造り出す様々の物質的・精神的なものの形、つまり「文化」の基本形に大きく影響を与えているに違いない。

たとえば建築、庭園などは、以上二とおりの典型的な形として、まず思いつくのであるが、もっと精神的な文化の形で考えると、前述のように、自然科学における方程式がある。社会思想における「平等」というのもそうではないか。人間の基本的権利の平等、男女の平等というのも、生物学的な、あるいは普遍的な文化的な事実であるよりも、シンメトリー的思考の文化の産物であろう。物の等価交換という経済原則、貿易上の原理も、物質についての事実であるよりも、人為的な文化の産物であり、西洋的な発想にもとづくのであろう。

生物学者本多久夫によると、およそ生物の体全体は一枚の閉じたシートでできていて、その閉じた表面と内側はオモテとウラ（生物学用語でventral-dorsal）の関係になっていて、両者ははっきり区別されている、という。生体内部の独立した臓器や、個々の細胞も、同じような構造を持っているが、そのオモテとウラは逆で、臓器や細胞の内側がオモテで、外側がウラになる。そして生物が成長するときなど、オモテとオモテ、ウラとウラが接触し、エ ユウゴウ、変化するが、オモテとウラが接することはない。生物のうちでも、植物には多少の例外はあるが、動物については、このオモテ・ウラ構造はよくあてはまる、という。

また生物の体には、とくにその表面で、オモテ・ウラ構造と対立するシンメトリー構造ができるが、興味深いことに、オモテ・ウラ構造ができかかって、うまく行かなかったとき、シンメトリー構造ができることがある、という。シンメトリー構造とは、オモテ・ウラ構造の出来損ない、ということなのだろうか？

人の文化の世界にも、このオモテ・ウラ構造はかなりよく当てはまる。他人の家のオモテから訪ねた人は、オモテ的挨拶（あいさつ）を交わして辞去する。戦場の兵隊は、敵方の兵隊のオモテだけに接して、そのウラ、つまり母国における日常の姿では……考えない。つまり、出会いのなかで、お互いが対等・等価に理解しあうことはない。

人を、人と人との出会いの場でダイナミックに考えるとき、他者の理解はシンメトリー的人間理解よりも、オモテ・ウラ的理解の方が現実的、かつ普遍的ではないか。

人と人とは、まず顔と顔とをつきあわせる。すなわち、まずオモテとオモテで出会う。

他者のオモテはすぐに理解できるが、そのウラはどうなっているのか、ウラはふつうすぐには理解不可能である。実は、ウラは、そのオモテの当人じしんにとっても、必ずしも明らかではない。オモテにとって不可解なウラは、時にオモテの世界をサマタ（オ）げ、それに反逆する。

人は、同じようなオモテの他者を求めて友をつくり、群をつくっていく。オモテどうしが睦（むつ）みあう過程で、お互いのウラは、プライバシーのようなウラ独自な世界をつくっていき、オモテはオモテ、ウラはウラとして、オモテ・ウラ構造を支えていく。

人の集団や、その制度、儀式などの文化についても、同じような構造が考えられる。異文化の理解はオモテから始まり、オモテ相互は比較的に理解しやすいが、異文化のウラはなかなか理解されない。

人の平等、モノの等価、国家の対等などのシンメトリー原理はどこから出てくるのか。

それは、第三者の視点、直接当事者でない立場の見方からくるのだ、と考える。シンメトリー原理では、相対する人と人、モノとモノ、組織体どうしは、オモテどうしは等しく、また同じように、そのウラどうしも等しいと考える。それは直接経験するところと合ってはいないが、観念、理想の言（コト）を通して見るのである。現実における出会いの場で考えると決して平等、対等ではないが、平等であるという観念、理想が、やがて現実を変えていく、という面も重要であろう。自然にあるあらゆるモノはどれを取っても決して等しくはないが、数学的等式に基づく生産は、やがて等しいモノを造り出す。シンメトリーに基づく建築や庭園は、自然とは異なる人為の世界の象徴として造り出されてきた。

一般に、出会いの始まり、出会いの当事者が突きあたるのはオモテ・ウラ構造だが、時間の経過とともに、シンメトリー構造が強くなるだろう。

オモテは、もともと人の顔の前面という意味で、万葉集にその用例が現れる。frontはＯＥＤ(『オックスフォード英語辞典』)によるとforehead, faceの意味のラテン語からきていて、十三世紀頃からの用例がある。その点、オモテとfrontはよく似ている。そして、ウラもbackも、どちらも人の体のうしろ側の意味がもとにある。

ところが、日本語のウラは万葉集でも、人の体ばかりでなく精神的な意味でもよく使われていた。古語辞典によると、ウラは、人の体の内側を指すために、心、感情の意味を持つようになったという。ここから、ウラは、日本文化固有の重要な言葉となり、それにつれて、オモテも、直接には見えない精神的世界をそのウラに秘めているという意味を持ってくる。能面のオモテは、その典型的表現の一つであろう。

日本文化の理論では、すでに多くの論者が、オモテ・ウラについて語っている。また同じような一対のタームとして、タテマエ―ホンネ、ソト―ウチ、ハレ―ケなどがある。

西洋文化にも、似たような原理はある。たとえば、パブリックとプライベートなどがある。しかしオモテ・ウラは、生物の体の場合のように常に一対の構造である点で、これとは違っている。またフロイト[注8]以後、意識的行為に対して潜在意識の世界を重視する考えが現れたが、精神分析学者たちは、一般に潜在意識の働きを健全でないとして治療し、改めるべき対象として扱う傾向がある。

中国を中心とする文化圏では、古来とくに中国語の文字(Chinese characters)を主たる外交用語、学問・思想の用語として、互いに交流してきたという歴史がある。これらの圏内の諸文化の間では、中国文字がお互いの文化のオモテを形成してきた、と言えるだろう。日本も古代以来、中国、朝鮮の諸国と主に中国文字によって交流してきた。それは明治維新の直前にまで及び、たとえば来日した朝鮮使節団を迎える日本の儒学者は、主に中国文字の書面を交換して交流していた。

他方で、この中国文字は、古代日本に受け入れられて、日本の内部で流通する「漢字(Sino-Japanese)」となった。日本人は古代、中国文字を漢字として学び、やがて自らの大和言葉をこの漢字によって表記するようになった。中国文字と漢字とは、オモテとウラの関係にある。中国文字と漢字とは一見形は似ているが、別物である。何よりも意味内容が同じでない。たとえば「手紙」は漢字ではletterのことだが、中国文字としてはtoilette paperである。古来日本の外交官や儒学者は、オモテは中国文字で書かれた書面で中国、朝鮮の人々と交際しながら、漢字・漢文の教養で考え、応対していた。そして漢字は、近代以後、西洋語の翻訳語としても使われた。その結果、西洋語と漢字翻訳語との間でも、同じオモテ・ウラの構造が形成された。私たちは今日でも西洋語を読み、翻訳語で理解し、また翻訳語で考え、西洋語で発表している。

さらに、古代日本人は漢字をもとにしてかな文字を造りだした。以後、漢字は主として、先進中国文化の学問、政治、宗教上の用語として使用され、他方かな文字は私的な場で、手紙、歌、日記、小説、恋文など、日常の大和言葉に固有の表現に使われた。漢字はオモテ向きの世界の用語で、男文字と

言われ、かなはウラの場の言葉で、女文字と言われた。やがて日本語の歴史の中で、オモテの言葉＝漢字と、ウラの言葉＝かなとは、一つの緊密な言語構造を造っていった。すなわち漢字の音読み―訓読みと、漢字かな混じり文である。構造主義の用語で言えば、前者は、[2]漢字とかなとの連合関係(paradigmatic relation)で、後者は漢字とかなとの統合関係(syntagmatic relation)である。漢字文化圏で、このような漢字受け入れ法は、他に例がない。言葉の用法は人間の思考・文化の構造を深く支配すると思われるので、この漢字・かな構造が、オモテ・ウラ構造を強化し、日本固有の文化の形を造っていった、と考えられる。

ところが近代以後、大量の西洋語の到来とともに、その西洋語を多く漢字翻訳語で置き換えて理解する文化が生まれた。society を見ると、「社会」のことかと理解する。right は「権利」によって置き換える。すなわちオモテの西洋語に対して、今度は漢字がウラの役割を果たすことになった。

漢字は、中国語や西洋語のオモテに対してはウラで、日本語のかなのウラに対してはオモテである。たとえば今日でも、国際的な場では society のオモテに対して「社会」はウラで、また国内では「社会」のオモテに対して「よのなか」はウラである。

シンメトリー原理の西洋文化の立場から見ると、オモテ・ウラ原理はいかがわしいというような印象を与えるようで、アメリカ人はよく日本人の行動をこの観点から、double standard などと言って批判する。しかし右に述べたように、オモテ・ウラは普遍的な原理であり、これからの世界で、異質な文化との出会いがますます多くなっていくことを考えると、[3]この原理による考え方は役に立つし、有効であるのではないか。異文化の出会いは、オモテとオモテから始まるのだが、そのオモテとは、そのウラを前提としたオモテと心得るのである。

（柳父章『未知との出会い　翻訳文化論再説』による。原文の表記を一部変更した。また原文の一部を省略した。）

注① ジャン＝ジャック・ルソー……十八世紀の哲学者。（一七一二～一七七八）

注② レヴィ＝ストロース……クロード・レヴィ＝ストロース。二十世紀の社会人類学者。（一九〇八～二〇〇九）

注③ カセット効果……筆者の造語。ここでは「乏しい意味しか持たなかったはずの新しい言葉が、言葉自体の魅力とそこに寄せられる漠然とした期待とによって、多くの人をひきつける現象」を指す。

注④ 和辻哲郎……二十世紀の哲学者、倫理学者。（一八八九～一九六〇）

注⑤ ニイチェ……フリードリヒ・ヴィルヘルム・ニーチェ。十九世紀の哲学者。（一八四四～一九〇〇）

注⑥ 複雑系……独立した個々の要素とそれらで構成される全体とが互いに影響し合う複合体。

注⑦ クレオール……植民地などで、言語や文化などのさまざまな要素が混交してゆく現象。

注⑧ フロイト……ジークムント・フロイト。十九世紀末から二十世紀前半にかけての精神分析学者。（一八五六～一九三九）

問1　傍線部ア～オのカタカナを漢字に直し、楷書で書きなさい。

ア　ソウダイ　　イ　ジョウヨ　　ウ　アザムき　　エ　ユウゴウ　　オ　サマタげ

問2　空欄 A ～ C に入れる語として最も適当なものを次から選んで記号で答えなさい。ただし、同一記号の反復使用はできません。

ア　人為的　　イ　受動的　　ウ　楽観的　　エ　悲観的

オ　主観的　　カ　客観的　　キ　応用的　　ク　基本的

問3　傍線部1「その有効性の限界」について、五十字以上、六十字以内で説明しなさい。書き出しを一字下げる必要はありません。句読点などの符号も一字と数えます。

問4　空欄 い ～ ほ には、それぞれ「事（コト）」「言（コト）」のどちらが入りますか。「事」であれば**ア**の、「言」であれば**イ**の、記号で答えなさい。

問5　傍線部2「漢字とかなとの連合関係」について、その説明として最も適当なものを次から選んで記号で答えなさい。

ア　オモテの世界で使われる漢字と、ウラの場で用いられるかなとが一つの密接な言語構造を造っていること。

イ　中国の文字を日本内部で使う文字として学ぶ一方、自らの言葉を漢字で書き表す方法を生み出したこと。

ウ　漢字を学問・政治・宗教面における用語の表記として使用し、かなを私的な場で日常的に使用していること。

エ　漢字が伝来した時の音を保存して漢語を使用する一方、古来の和語にも漢字をあてはめて表記していること。

オ　漢字・かな構造が日本人の思考や文化の構造を根底から支配し、オモテ・ウラ構造を強化していること。

問6　傍線部3「この原理による考え方は役に立つし、有効である」という考え方について、その説明として最も適当なものを次から選んで記号で答えなさい。

ア　シンメトリー構造の考え方に立てば、互いを平等のものとしてとらえる姿勢の徹底こそが、異質な文化との出会いを円滑にする。

イ　オモテ・ウラ構造の考え方に立てば、理解しやすいオモテでの接触を通し、自己にとっても不可解なウラの理解が進む。

ウ　オモテ・ウラ構造とシンメトリー構造とを比較検討しながら世界を認識していくことが、異質な文化の相互理解を促進する。

エ　シンメトリー構造の考え方に立てば、異なる文化的背景を持ったもの同士の理解には、言(コト)によって造られる物語が有効である。

オ　オモテ・ウラ構造の考え方に立てば、オモテとオモテの相互交流を重視し、不可知な領域の多いウラを排除して交流を深められる。

二　次の文章を読んで、後の問い（問1～9）に答えなさい。

「サン・ジュリアン視界にあり。本機は十分以内に着陸す」

機上の無電技師はこの報知を、沿線の各局に発信した。

南米大陸の南端マジェラン海峡からブエノス・アイレスに至る、二千五百キロメートルの沿線に、同じような飛行場は数多く並んでいるのだが、このサン・ジュリアンの飛行場は、昼と夜との国境に位していた。ここから先は、暗黒な神秘の世界になるのだ。

後席にいる無電技師が、操縦士に紙片を渡した。

――雷鳴はなはだしく、レシーバーは空電に満つ。飛行を中止してサン・ジュリアンに一泊してはいかが？」

ファビアンは微笑した。見はるかしたところ、空はプールの水のように平静だった、彼らの前途の飛行場からは、「快晴、無風」を報じてきていた。彼が答えた、

――続航しよう」

無電技師は思った、果実の中に虫がひそむように、雷雨がどこかにひそんでいるのだと、だから今夜は、見かけはこんなに立派でも、実はいたんでいるはずだと。いまにもクサろうとしている夜という名のこの暗い影の中へ飛び込んで行くのが、彼には気味悪かった。

発動機の回転をおとして、サン・ジュリアンに着陸しながら、ファビアンはあるもの憂さを感じた。人間の生活を和らげてくれるあらゆるものが、彼に近づきながら拡大されつつあった。彼らの家、彼らのコーヒー店、彼らの散歩道の並木、等々がそれだ。彼の気持は今、征服の日の夕暮に、自分の大帝国の領土の上にうなだれて、人のつつましやかな幸福をそこに見いだした征服者のそれに似ていた。ファビアンは今、武器を投げ出し、自分の気だるさと節々の痛さを感じ、貧しさも富の一種だと知って、この土地に住む素朴な人間になり、変ることのない景色を窓からながめて暮したい気持だった。この小っぽけな村に住むこと、それさえ彼は受入れたはずだ、一旦やりたいことをしとげたあとなら、人は生活上の偶然を受入れて、それを愛することも可能なはずだから。それは恋愛のように、人を盲目にしてしまう。ファビアンは、長くこの土地に住みついて、この土地の永遠の一部に参加したいとさえ思ったはずだ、なぜかというに、一時間足らずの短い時間を彼が過す小さな市々と、彼が横ぎる古い壁をめぐらした庭園とは、彼にはどうやら、自分には関係なしに、永久に存在するもののように思われるからだ。見ると村は機体に向って上昇し、彼に向ってひらけてきた。するとファビアンの思いは駆けめぐる、友情だの、優しい女たちだの、白いテーブル・クロスをあいだにはさんだ差向いの食事だの、すべて、いつとはなしに永久に身に慣れるもののうえを。今この村は、早くも機翼とすれすれに流れていた、壁が保護しない閉ざされた庭園の神秘をさらけ出して。ところが、いよいよ着陸して

みると、ファビアンには、石壁のあいだに静かに動いていた二、三の人間以外には、自分が何も見なかったことに気がつくのだ。村は、自分の不動性を唯一の武器に、自分の愛情の秘密を守り続けるのだ。村は、自分の持つ優しさをファビアンにコバ(イ)むのだ。そうだ、この村を征服するがためには、ファビアンは、まず自分の行動を諦(あきら)めなければならないのだ。

小休止の十分間が過ぎたとき、ファビアンはまた出発しなければならなかった。

彼はサン・ジュリアンをカエリ(ウ)みた。それはすでに一にぎりの光でしかなかった、やがて星、やがてこの世の最後に、彼の心を誘った浮世のほこりも消え失(う)せた。

「もう計器板が見えなくなった。点灯だ」

彼はスイッチを入れた、ところが操縦席の赤ランプはまだ、日暮の薄青い光の中で、いかにも希薄な光しか指針の上に投げないので、赤くは見えなかった。彼は電球の前に指をやってみた、指がほんのわずか染まった。

「まだ早すぎる」

だが夜はすでに、黒い煙のように地表から昇(のぼ)ってきて、谷間々々を満たしていた。平野と谷間の見分けがもうつかなかった。早くもすでに、村々には灯火がついて、彼らの星座は、お互いに呼びかわしていた。すると彼もまた、指で舷灯(げんとう)にまばたきさせて、村々に答えた。この灯火信号を見て、地上は緊張するらしい様子だった。それぞれの家が、その星に点火して、これを巨大な夜に向けた、海に灯台の火を向けるように。人間の生命をおおい包んでいるあらゆるものが、早くもきらめきだした。今日という日の、夜への推移が、入江にでも入るかのように、[2]静かに美しく行われる光景に、ファビアンは心地よくながめ入った。

彼は操縦席の椅子に頭を埋めた。指針のラジウム(注①)が光りだした。その一つ一つに、彼は数字を読んだ。彼はそのいずれにも満足だった。彼は、空中にどっかりと腰をおろした自分の姿を見いだした。彼は指で鋼鉄製の梁材(りょうざい)に触れてみた。そしてこの金属の中を流れる生命を感じた。震動はしなかったが金属は生きていた。発動機の五百馬力が金属の中にいともおだやかな流れを生んで、その冷たさを天鵞絨(ビロード)の肉に変えた。またしても今、飛行中、彼は眩惑(げんわく)も、酩酊(めいてい)もなく、ただ肉体の神秘な働きだけしか感じなかった。

今も彼は[3]自家用の宇宙を再建し、ゆっくりとくつろいで、そこに腰をすえようと肘(ひじ)をはった。

彼は配電板を軽くたたいて、スイッチの一つ一つに触れてみた。わずかに身じろいで、動きやすい夜が背負っているこの五トンの金属の動揺を、最もよく感じ得る位置をとたずねた。ついで、補助ランプを探り寄せ、また元の位置に押しやり、一度手ばなして、また握り、すべらないと確かめてまた手ばなし、今度はハンドルの一つ一つを軽くたたき、正確に握れるよう、盲人の世界で指を訓練した。ついで、指がそれをよく覚えこんでしまうと、彼は

はじめてランプをつけて、精密な機械の並んでいる操縦席の装飾にし、ダイビングでもするような、夜へのこの突入を標示板の上でだけ、見守った。ついで、何一つ動揺するものも、何一つ顫動するものも、何一つ震動するものもなく、ジャイロ[注②]も、高度計も、発動機の回転数も安定して変化を見せないので、彼は軽い伸びをし、後頭部を座席の背中に寄せかけた、そして、説明しがたいほどの大きなよろこびを人に味わわせるあの空中の無念無想に入った。

さて今、こうして夜警のように、夜の真っただ中にいて、彼は、夜がみせている、あの呼びかけ、あの灯、あの不安、あれが人間の生活だと知るのだった。影の中の一つの星、あれは離れ家だ。星の一つが消えた、あれは愛の上に閉ざされる一軒の家だ。

その家はまた、悲しみの上に閉ざされたのかもしれない。いずれにしても、それは自分以外の世界に対して、信号をしなくなった家だ。ランプの前でテーブルに肘ついているあの農夫たちは、自分たちが何を希望しているものか知らない。彼らの欲望が、彼らを取巻く巨大な夜の中を、どこまで遠く届くものか知らずにいる。それなのに、ファビアンは、千キロメートルも遠くから飛んで来て、息づく機体を、深い空気の波頭が揺り上げたり、揺りおろしたりするときなど、また、戦争中の国家のような雷雨の多くを切り抜けてその隙間に月明りを探りながら飛んで来たときなど、またはそれらの灯火の一つ一つを征服でもするような気持で追い越して行くときなど、彼ファビアンはあの人たちの欲望をありありと感じるのだ。あの農夫たちは、自分たちのランプは、その貧しいテーブルを照らすだけだと思っている。だが、彼らから八十キロメートルも隔たった所で、人は早くもこの灯火の呼びかけを心に感受しているのである。あたかも彼らが無人島をめぐる海の前に立って、それを絶望的に振ってでもいるかのように。

こうして、パタゴニアから、チリーから、パラグアイから、三つの別な郵便機が、南と、西と、北とから、ブエノス・アイレス目がけて、今しも帰還の途中にあった。ブエノス・アイレスでは、真夜中近く、欧州行の郵便機を出発させるため、これら三方面からの郵便物が空輸されて来るのを待ち受けている。

三人の操縦士は、それぞれ箱船のように鈍重な幌の奥にうずくまって、夜の中をさまよいながら、各自の飛行に工夫をこらしていた。やがて彼らは、雷雨の、または平静な空から、この大都会の方へと静かに降りて来ることだろう、山から降りて来る風変りな農夫たちのような格好で。

会社の全航空路にわたる責任をその双肩にになって立つリヴィエールは、ブエノス・アイレスの着陸場を、縦横に歩き回っていた。彼は無言だ、なぜかというに、三台の飛行機が到着するまでは、彼には今日という日が恐ろしい。[4] 一分ごとに、電報が到着するたびに、彼は、あるものを、運命の手から奪い取り、未知の領域を縮め、配下の機体と人員を、夜の奥から岸べにまで救い出しつつある自分だと、ありありと意識するからだ。

ひとりの職工が、無電局のニュースを報告に来た。

――チリー便から、ブエノス・アイレスの灯が見えるといって来ました」

――よろしい」

やがてリヴィエールの耳に、この機の爆音が聞えてくるはずだ。潮の干満と神秘とに満ちあふれた海が、長いあいだ翻弄していた財宝を港に引渡すように、早くも夜が今、一機を返してよこしたのだ。しばらくしたら、他の二機も、やがて夜から取戻されることだろう。

そうさえしたら、今日という一日は清算される。そうさえしたら、疲れた搭乗員は、新しい搭乗員と交代して、眠りに行くはずだ。ただひとり、リヴィエールにだけ、休息は許されない、なぜかというに、そのときはまた、欧州便が彼に新しい不安を背負わせるはずだから。いつになっても、こうあるはずだから。いつになっても、こうあるはずだった。いつになっても。この年功を経た奮闘家が、はじめて今、自分が疲れていると知って驚くのだ。機の到着は、戦争を終熄させ、幸福な平和時代を開始するあの勝利とは似もつかない。[5] 彼にとっては、すでにしるされた同じような、千の足跡の前方にしるされる一つの足跡以外には、ついに何事も成就されるということはあり得ない。リヴィエールには、自分が、長いあいだ、重い物体を差上げ続けてきたような気がする。いわば、休む間もなければ、果てる希望とてもないこれは努力なのだ。「僕は老いてきた……」行動自体のうちに彼が自分のカテを見いださないということは老いた証拠のように思われた。いまだかつて、ただの一度も思ったこともないような、こんな問題に心を労している自分にふと気づいて、彼は驚いた。それにもかかわらず、彼がこれまで絶えず押し退けてきた、やさしいものの集りが、目に見えない大洋のように、憂鬱な響きを立てて、彼に向って押寄せて来るのであった。「それらのものが、かくまでに身近に迫っているのか?……」彼は、今思い知った、自分が、すべて人間の生活を優しくしてくれるものを、老後の方へ、「やがて自分に余暇のできるとき」へと、少しずつ押しやってきていたのだと。なにか、実際に、やがていつの日か、自分に余暇ができ、一生の終りに近く、自分が想像しているような幸福な平和が得られでもするかのように。ところが、平和はいつになってもないはずだった。勝利もないかもしれないのだ。なぜかというに、あらゆる郵便物が、ことごとく到着し尽すということは絶対にないはずだから。

老職工長のルルーの前で、リヴィエールは立ち止った。ルルー、彼もまた、四十年来働き続けてきた。労働に彼はあらゆる力を捧げてきた。毎晩、十時十二時になって、彼はうちへ帰るのだが、そこに彼を待っているのは、次元の新しい世界でも、また彼の気持を変えてくれる脱出の世界でもなかった。温厚な顔をあげて、青黒く油のにじんだプロペラー・ボス[注③]を指さしながら、「固く食い込んでいやがったが、やっとはずれやしたよ」と叫ぶこの男に、リヴィエールは微笑[6]を返した。「工場へ命令して、こんな機械はもっと楽に組立てるようにしなければなるまい」彼は指で食い込んでいた跡にさわってみたが、やがてふたたび、ルルーをじっと見守った。彼の顔のいかめしい皺を見ていると、妙な質問が唇にのぼってきた。彼は自分でもおかしかった。

――ルルー、君は一生のあいだに、色恋に力を入れたことがあったかい?」

――色恋ですかい、旦那(だんな)、何しろどうも……」

――君も僕と同じだ。君にも時間がなかったのだ……」

――とにかくどうも……」

リヴィエールは、その声の響きをじっと聞いた。答えが苦味を帯びているか、知ろうとして。ところが、答えに、苦味はなかった。[7]この老人は、自分の過去の生活に対して、立派な板を一枚みがき上げた指物師(さしものし)の澄んだ満足「これで、仕上がった」というあの尊い気持を感じている。

「僕の一生も、どうやらこれで仕上がった」とリヴィエールは思った。

疲労に原因する自分の寂しさを、全部おし片づけて、彼はカクノウコ(オ)の方へと歩きだした、チリー機がうなりを立てて近づいてきたので。

(堀口大學訳　サン・テグジュペリ『夜間飛行』による。原文の一部を省略し、一部を変更した。また、送りがなは原文の表記に従った。)

注①　ラジウム……放射性物質。暗所で青白く光る特質を利用して計器の文字盤・指針の夜光塗料に用いられた。

注②　ジャイロ……ジャイロコンパスの略語。方向を指し示す装置。

注③　プロペラー・ボス……プロペラを回転軸(駆動軸)に取り付けるためにはめる円筒状の部品。

問1　傍線部ア～オのカタカナを漢字に直し、楷書で書きなさい。

ア　クサろう　　イ　コバむ　　ウ　カエリみた　　エ　カテ　　オ　カクノウコ

問2　傍線部1「あるもの憂さ」について、ファビアンがそれを感じた理由の説明として最も適当なものを次から選んで記号で答えなさい。

ア　ありきたりの生活に安らぎを感じる素朴さを持ちながらも、それを素直に表現できない自分を疎ましく思ったから。

イ　自分がこれから向かう土地は、神秘な暗黒世界への入り口であり、それが絶望につながることを直観したから。

ウ　雷雨が自分の前に立ちふさがろうとしている現状に、果実の中に虫がひそむのと同じような不安を抱いたから。

エ　今の仕事を続ける限り、人間の生活を和らげてくれる優しさが、村を通り過ぎるだけの自分とは無縁だと感じたから。

オ　村の暮らしに憧れを感じる一方、どのような土地も結局はありきたりの平凡な場所にすぎないことも知っていたから。

問3　傍線部2「静かに美しく行われる光景」について、その内容を四十字以上、五十字以内で具体的に説明しなさい。書き出しを一字下げる必要はありません。句読点などの符号も一字と数えます。

問4　傍線部3「自家用の宇宙」について、その内容の説明として最も適当なものを次から選んで記号で答えなさい。

ア　飛行機の精密な動きを敏感に感知して思いのままに操縦できる特権的な立場。

イ　飛行機の無機的な操縦席に取り囲まれても神秘的な動きを止めない自らの肉体。

ウ　飛行機の機械的な反応によって自分が人間であることから離れられる隙間。

エ　飛行機の生命感あふれる躍動を通じて外界の変化を直接的に感受できる場所。

オ　飛行機の機械が持つ確かな存在感に取り囲まれて雑事から切り離された空間。

問5　傍線部4「今日という日が恐ろしい」のはなぜか。その理由として最も適切なものを次から選んで記号で答えなさい。

ア　今この時に操縦士の誰かが雷雨の中でさまよっていることを知り、その危険から救い出すことができるのは自分しかいないことをリヴィエールが確信しているから。

イ　三つの異なる方角からやってくる飛行機が、リヴィエールのいる土地に向かって無事に帰還していることを知り、そこに人間の力を超えたものの存在を感じ始めたから。

ウ　飛行機が無事に到着するかどうかは、偶然や運命に左右される問題であり、そうした未知の世界に自分の力が及ばないことをリヴィエールはよく知っているから。

エ　深い夜に吸い込まれて行方不明になった仲間の飛行機を取り戻すために、自分は不眠不休で働き続けなければいけないことをリヴィエールは自覚しているから。

オ　現実の世界とは異なる空想の世界に引き込まれてしまい、自分の会社に所属する飛行機を救出する英雄としてリヴィエール自身が賞賛される場を空想しているから。

問6　傍線部5「彼にとっては、すでにしるされた同じような、千の足跡の前方にしるされる一つの足跡以外には、ついに何事も成就されるということはあり得ない」とはどのような意味か、五十字以上、六十字以内で説明しなさい。書き出しを一字下げる必要はありません。句読点などの符号も一字と数えます。

問7　傍線部6「微笑」には、登場人物のどのような気持ちが表れているか。最も適当なものを次から選んで記号で答えなさい。

ア　憐憫（れんびん）

イ　寛容

ウ　寂寥（せきりょう）

エ　歓喜

オ　共感

問8　傍線部7「この老人」の人物像の説明として最も適当なものを次から選んで記号で答えなさい。

ア　自分の責務を遂行することそれ自体が喜びである人間。

イ　余暇にたっぷり時間を使える日を夢見て生き抜く人間。

ウ　命令されたことに逆らいもせず温厚に働き続ける人間。

エ　自分が何を求めるべきかを考えないで幸福に浸る人間。

オ　貧しさも富の一つの形だと知って愛情を守り抜く人間。

問9　この小説の特徴についての説明として最も適当なものを次から選んで記号で答えなさい。

ア　倒置表現を多用して厳しい状況に混乱する登場人物の迷いを暗に示している。

イ　比喩表現を多用して登場人物の到達した心境の普遍性を暗に示している。

ウ　専門用語を多用して孤高の世界に生きる登場人物の誇りを暗に示している。

エ　会話表現を多用して登場人物同士の人間関係の複雑さを暗に示している。

オ　独白を多用して行動力に欠ける登場人物の内省的な悲しみを暗に示している。